

912.3

9

高砂白樂天

弓八幡賀茂

老松當麻

竹笠島五弁

秦丸芬



高砂

脇三大臣

烏帽子御方

侍衣 六ツ腰 袴 扇持



今日も... 目も... 柞是八九品肥

後... 乃... 友成と... 我中地

... 乃... 郡... 乃... 友成と... 我中地

... 乃... 郡... 乃... 友成と... 我中地

高砂の浦... 乃... 友成と... 我中地



南風の吹くは 秋の風 吹くは 秋の風  
吹くは 秋の風 吹くは 秋の風  
吹くは 秋の風 吹くは 秋の風  
吹くは 秋の風 吹くは 秋の風  
吹くは 秋の風 吹くは 秋の風  
吹くは 秋の風 吹くは 秋の風

吹くは 秋の風 吹くは 秋の風  
吹くは 秋の風 吹くは 秋の風  
吹くは 秋の風 吹くは 秋の風  
吹くは 秋の風 吹くは 秋の風  
吹くは 秋の風 吹くは 秋の風  
吹くは 秋の風 吹くは 秋の風



...は商白や...  
...は...  
...は...  
...は...

生のね乃物説およそくをくい...  
...  
...

若乃人此...  
...  
...

なり...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

のそれ...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...









仲さくくちも 宿乃えよ 志はままりく

面取翌日三月透冠黒衣  
鉢巻指衣 大谷腰弓肩 我々もとくしくありぬ

信吉の者れ 非和いふよ 神ゆいんびりす

と悉いあしむるや 何れをこの久しき代に

神おのまあるの 鼓乃拍子をそりへて

し光強へまほこころ 酒の油あをま

東乃波まよる里 ねまき野 信吉の妻を

いかにが

まやゆの者乃あさうがこ 玉藻くるなる

尾陰の ね根よ 倚て 腰をまし 巴子

の足らるるに せり 櫛をまねて 乃

さきは 二月の 書衣よ 山 床四男 為難の

朝向やく 月信吉の 非あそび みるけ

たむあし たるよ 書衣よ 乃の 終極の

やにす びるる 信の ね乃 ね陰を うつる

やにす びるる 信の ね乃 ね陰を うつる

三つ海渡ははきからびけしりとの名  
 こころは神のまよひくゆるみそ  
 山城樂は舞はる万葉乃小忌衣は  
 ちたふゝ恋魔さくひたむむるの  
 神さしきさふれ系八民をめで万葉系  
 八命をのにおまほ乃ねんせはらくのお  
 ちたふすそけしむらぐれまがたのむ

弓八幡

脇三大  
 鳥州調友相  
 狩衣杏腰帯扇

湯代也業新也と山代もしるゆ男心  
 名も記はあさん 柳を八段宮後院

八幡の湯神事之部曲のたあれ八段ほれ

素行はれけの宴名とあかり唯今八幡小  
 下向位は上上四乃海浪為あき時あれやく

八鴻の雲も知らぬて  
流来れ民もそとて  
懐山もも恙にけり  
八幡山もも恙にけり

志山種ふ是にや八幡山も恙にけり

あしきすするまてい  
尉多衣口弓袋カクハ  
連男水衣睡床扇  
神する

見二月のふとそや  
常盤山朝朗

花乃都此空あしや  
雲と知らぬ風を

君が代を世にわらふ  
小石の敷とけりて

昔れは松乃葉色と常盤山  
翠千代を

色葉の妻乃日影を過て  
君女命は民

厚く岡の戸たもさけり  
さながらに

とちりれ神雲よふて  
控ひもさる世乃月

香流ふ乃石流あり  
ぬ流乃末まで

生れを流川大出のひ  
るも常はむ難



かゝるの代謂をへて今日尚社日  
上 社 日

は兼福よ業らと指あね事。是より別非也

かれを神上守ハ子軍振 神乃沙代ハ業

の弓蓬乃無まで代をきりてハ武家

沙代の初なり能と養一給ハ<sub>ウキ</sub>武

是ハ太平の沙代ハ志<sub>ウキ</sub>一と<sub>ウキ</sub>武<sub>ウキ</sub>一<sub>ウキ</sub>先

二乃弓を名<sub>ウキ</sub>一<sub>ウキ</sub>邪<sub>ウキ</sub>あ<sub>ウキ</sub>て<sub>ウキ</sub>あ<sub>ウキ</sub>見<sub>ウキ</sub>ヤ<sub>ウキ</sub>と<sub>ウキ</sub>さ<sub>ウキ</sub>を

いざ〜弓を名<sub>ウキ</sub>一<sub>ウキ</sub>てハ<sub>ウキ</sub>河<sub>ウキ</sub>乃<sub>ウキ</sub>沙<sub>ウキ</sub>用<sub>ウキ</sub>此<sub>ウキ</sub>あ<sub>ウキ</sub>

へさ<sub>ウキ</sub>を<sub>ウキ</sub>入<sub>ウキ</sub>者<sub>ウキ</sub>店<sub>ウキ</sub>周<sub>ウキ</sub>乃<sub>ウキ</sub>代<sub>ウキ</sub>を<sub>ウキ</sub>治<sub>ウキ</sub>め<sub>ウキ</sub>一<sub>ウキ</sub>武<sub>ウキ</sub>乃<sub>ウキ</sub>始<sub>ウキ</sub>ハ<sub>ウキ</sub>

弓<sub>ウキ</sub>策<sub>ウキ</sub>を<sub>ウキ</sub>治<sub>ウキ</sub>る<sub>ウキ</sub>見<sub>ウキ</sub>干<sub>ウキ</sub>戈<sub>ウキ</sub>を<sub>ウキ</sub>考<sub>ウキ</sub>こ<sub>ウキ</sub>め<sub>ウキ</sub>一<sub>ウキ</sub>例<sub>ウキ</sub>を<sub>ウキ</sub>也<sub>ウキ</sub>

心<sub>ウキ</sub>く<sub>ウキ</sub>建<sub>ウキ</sub>弓<sub>ウキ</sub>を<sub>ウキ</sub>袋<sub>ウキ</sub>よ<sub>ウキ</sub>引<sub>ウキ</sub>連<sub>ウキ</sub>一<sub>ウキ</sub>た<sub>ウキ</sub>銀<sub>ウキ</sub>を<sub>ウキ</sub>引<sub>ウキ</sub>お<sub>ウキ</sub>ぎ<sub>ウキ</sub>

ひ<sub>ウキ</sub>家<sub>ウキ</sub>の<sub>ウキ</sub>よう<sub>ウキ</sub>左<sub>ウキ</sub>平<sub>ウキ</sub>乃<sub>ウキ</sub>沙<sub>ウキ</sub>代<sub>ウキ</sub>の<sub>ウキ</sub>志<sub>ウキ</sub>を<sub>ウキ</sub>一<sub>ウキ</sub>る<sub>ウキ</sub>れ<sub>ウキ</sub>

ま<sub>ウキ</sub>と<sub>ウキ</sub>周<sub>ウキ</sub>乃<sub>ウキ</sub>代<sub>ウキ</sub>志<sub>ウキ</sub>を<sub>ウキ</sub>和<sub>ウキ</sub>約<sub>ウキ</sub>治<sub>ウキ</sub>め<sub>ウキ</sub>と<sub>ウキ</sub>杖<sub>ウキ</sub>兼<sub>ウキ</sub>乃<sub>ウキ</sub>也<sub>ウキ</sub>

を<sub>ウキ</sub>引<sub>ウキ</sub>多<sub>ウキ</sub>ハ<sub>ウキ</sub>上<sub>ウキ</sub>兼<sub>ウキ</sub>乃<sub>ウキ</sub>引<sub>ウキ</sub>と<sub>ウキ</sub>る<sub>ウキ</sub>や<sub>ウキ</sub>兼<sub>ウキ</sub>の<sub>ウキ</sub>治<sub>ウキ</sub>め<sub>ウキ</sub>

く、接ひの海をききて、悉く船にのりて、  
徳のありも、海をなくあひく、草木のことも  
笑もあつたある、沙弥徳をめて、毎に神  
死をめてたうらる、  
程と月をさして下

と海に習ふより、  
不<sup>ル</sup>上<sup>ル</sup>に、  
格弓をそて代を治め、始とつて會  
の海代も、海りても、別當社の由神カ也、  
本

入るに神カ會名、三律をたう、久保ひより  
是、  
用く、意神、天會、社、賢、運、海、位、也、  
曲、  
例、  
下、  
下、  
下、  
下、

乃玉字の部は屋字乃棟梁の儀を  
形に重箱をもちて洛陽の南乃  
山をくわぬ代をもちんきて  
いふ所の如く現し給ひされ  
御名も是を退治の海なる九川  
と此の儀をいひて七ヶ日乃海  
と云ふ也乃天は若戸の神河を  
乃玉字の部は屋字乃棟梁の儀を

乃玉字の部は屋字乃棟梁の儀を  
形に重箱をもちて洛陽の南乃  
山をくわぬ代をもちんきて  
いふ所の如く現し給ひされ  
御名も是を退治の海なる九川  
と此の儀をいひて七ヶ日乃海  
と云ふ也乃天は若戸の神河を



を海より流るるなる情を前より神徳を自  
らうりきり<sup>お上</sup>実や<sup>お上</sup>流るるをくげ二  
月乃神まうりか<sup>お上</sup>神徳を<sup>お上</sup>難き  
難き<sup>お上</sup>世乃流るるを<sup>お上</sup>松風の更の月の<sup>お上</sup>神  
徳を<sup>お上</sup>奏し<sup>お上</sup>ぬ<sup>お上</sup>ん<sup>お上</sup>初る<sup>お上</sup>おひ  
も<sup>お上</sup>の<sup>お上</sup>代<sup>お上</sup>の<sup>お上</sup>う<sup>お上</sup>て<sup>お上</sup>一<sup>お上</sup>我<sup>お上</sup>  
被<sup>お上</sup>代<sup>お上</sup>と<sup>お上</sup>海<sup>お上</sup>と<sup>お上</sup>は<sup>お上</sup>お<sup>お上</sup>なる<sup>お上</sup>ま<sup>お上</sup>て<sup>お上</sup>と<sup>お上</sup>事<sup>お上</sup>

と<sup>お上</sup>流<sup>お上</sup>る<sup>お上</sup>る<sup>お上</sup>神<sup>お上</sup>と<sup>お上</sup>我<sup>お上</sup>なり<sup>お上</sup>が<sup>お上</sup>い<sup>お上</sup>流<sup>お上</sup>代<sup>お上</sup>を<sup>お上</sup>事  
らんと<sup>お上</sup>唯<sup>お上</sup>今<sup>お上</sup>は<sup>お上</sup>る<sup>お上</sup>る<sup>お上</sup>多<sup>お上</sup>り<sup>お上</sup>の<sup>お上</sup>儀<sup>お上</sup>を<sup>お上</sup>事<sup>お上</sup>の<sup>お上</sup>  
神<sup>お上</sup>徳<sup>お上</sup>を<sup>お上</sup>う<sup>お上</sup>た<sup>お上</sup>り<sup>お上</sup>お<sup>お上</sup>ま<sup>お上</sup>て<sup>お上</sup>り<sup>お上</sup>記<sup>お上</sup>す<sup>お上</sup>る<sup>お上</sup>ふ<sup>お上</sup>う<sup>お上</sup>を<sup>お上</sup>  
に<sup>お上</sup>ら<sup>お上</sup>り<sup>お上</sup>く<sup>お上</sup>神<sup>お上</sup>の<sup>お上</sup>御<sup>お上</sup>り<sup>お上</sup>神<sup>お上</sup>勅<sup>お上</sup>を<sup>お上</sup>く<sup>お上</sup>お<sup>お上</sup>  
く<sup>お上</sup>を<sup>お上</sup>奏<sup>お上</sup>し<sup>お上</sup>あ<sup>お上</sup>へ<sup>お上</sup>し<sup>お上</sup>と<sup>お上</sup>り<sup>お上</sup>お<sup>お上</sup>は<sup>お上</sup>る<sup>お上</sup>も<sup>お上</sup>衆<sup>お上</sup>の<sup>お上</sup>  
事<sup>お上</sup>え<sup>お上</sup>て<sup>お上</sup>是<sup>お上</sup>を<sup>お上</sup>事<sup>お上</sup>と<sup>お上</sup>し<sup>お上</sup>る<sup>お上</sup>る<sup>お上</sup>事<sup>お上</sup>あり<sup>お上</sup>た<sup>お上</sup>なり<sup>お上</sup>事<sup>お上</sup>  
お<sup>お上</sup>う<sup>お上</sup>を<sup>お上</sup>く<sup>お上</sup>面<sup>お上</sup>取<sup>お上</sup>物<sup>お上</sup>男<sup>お上</sup>透<sup>お上</sup>冠<sup>お上</sup>袴<sup>お上</sup>衣<sup>お上</sup>大口<sup>お上</sup>腰<sup>お上</sup>帯<sup>お上</sup>  
平<sup>お上</sup>太<sup>お上</sup>刀<sup>お上</sup>黒<sup>お上</sup>髪<sup>お上</sup>神<sup>お上</sup>巻<sup>お上</sup>扇<sup>お上</sup>ね<sup>お上</sup>と<sup>お上</sup>上<sup>お上</sup>河<sup>お上</sup>

55  
も難くもあらじ人此おのりる國地乃  
人のまはまぐ人と推ひの体もゆるく死まぬ室  
相の月弓れば百葉代の子をまてもうとく  
まてとて思ふちる多ら乃神とハ我事と  
月の初卯の神糸面也 うんやう人  
神とてまて 奇 神乃白事海西のくまを  
代のくまくうまふとや 年 室も末世と

ひあつうく 神乃ちひハもすふかく  
あつたある 神お好おひそ何とくうらなる  
神代とちりれ 神推ひもちり定めある人  
神び君乃神推天下統一統もちるなり  
神代と乃世のちるれ 神此のらふ 神  
小ま君も 神乃君ハ久雲の月ノ徳  
乃男のまや 神此をちりて 神此をちりて

五七

く松の風まても皆非神と成す公小あを  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
ゆらなりなる非塵う抄さうなりなる

三

○老松

脇三大

烏帽子細衣

狩衣杏腰帯扇

音芽... 海する里方乃... 玉... 栞も... 松の... 梅  
はの... 我事あり... 我... 時  
を信... 帯に... び... 家

兼乃... 我と信... 錦... あり  
あれ... 城... た... 是... 友... あり... 山... 音... 谷

九列の藤キツより老上野のふもとの  
くもも吹井キツに浦キツつひのふれやうり  
わらわらて揚定キツかき藤の定キツ杉キツをたるとら  
ゆき雲キツのとももキツきぬくし物書キツあみやあ  
ぬひらげくしゆ地キツもキツ雲キツあけく  
雅キツ小キツあまもキツまキツしキツ神キツ日キツあまのキツ神キツさキツあキツすキツあキツすキツ  
附み衣太極ヲ二人一考上梅乃キツ花キツ並キツ春キツとキツさキツてキツゆキツふキツくキツあキツすキツ  
男衣太極第扇

此キツ梢キツかキツ 松キツ乃キツとキツ久キツ色キツ何キツれキツをキツえキツ 十キツ海キツのキツうキツさキツきキツ  
縁キツかキツるキツとキツえキツんキツ色キツをキツあキツてキツ潜キツふキツひキツくキツせキツくキツのキツくキツ  
らキツれキツ松キツ乃キツ戸キツにキツ 春キツをキツあキツてキツ息キツはキツるキツ何キツふキツ  
里キツ方キツれキツ弟キツ東キツ本キツまでキツ神キツのキツ魚キツ小キツかキツひキツくキツやキツとキツまキツめキツきキツ  
とキツらキツあキツまキツのキツかキツあキツらキツとキツまキツとキツらキツふキツあキツらキツ乃キツ光キツのキツ  
とキツけキツきキツまキツをキツ乃キツゆキツふキツ松キツ乃キツひキツ乃キツ思キツまキツをキツほキツふキツ  
若キツ造キツくキツ 女キツ嶋キツ乃キツ海キツもキツもキツ思キツまキツをキツほキツふキツ

木の花  
梅の花  
をがこらん

かほらの河まはる雪のふるえも梅の  
おの梅の影やまらとる梅の海河地  
あやわらうんく ふうはなる人に  
あひしうささめいふ こと乃事とては  
何事あしひそ あまの 山ふそひて梅樹と  
あまの木とすひそ あまの 何ともさうらも梅  
あまの梅樹とそあかあやしく あまの 雲を梅

あまの河をえしとさそや あまの ながくはし  
あまの河まはるとはあまの梅あり梅木とあまの  
あまのあても梅あまの梅とあまの あまの  
あまのなる木とあまの河をさ梅と あまの  
あまの梅も梅のひまう あまの 梅を掛らまら  
あまの梅はあまの あまの 梅もあまの梅のひまう  
あまの梅の梅をさ あまの 梅もあまの梅のひまう



あそび  
の  
まじり  
は  
の  
まじり  
は  
の  
まじり  
は  
の  
まじり  
は  
の

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇  
十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十  
二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十  
三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十  
四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十  
五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十  
六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十  
七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十  
八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十  
九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

箱白磁箱衣 大三葉 紅梅反と舞の掃人  
大口腰帶扇 三葉 紅梅反と舞の掃人

お八河より慰め給ふまき 掃りつづる春之

あそび  
の  
まじり  
は  
の

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇  
十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十  
二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十  
三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十  
四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十  
五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十  
六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十  
七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十  
八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十  
九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

あそびのまじり  
老木の神松乃  
の せもやらのふさくら石の













中ふ入りとみしる白浪乃き海ら見れはは海  
 乃ありそもいひ捨て又波おしきめひ  
 分り本雷上油教志きるまめいさうして日  
 月光を暁て心乃もあるとく中て怒き  
 けふあつしうよ天女舞衣大口腰帯天女我ら是は信  
 小信て非も移ひまきまき舞衣大口腰帯  
 女天と我半之サ上天女天昌玉扇  
 舞衣大口腰帯  
 天昌玉扇  
 我ら是は信

舞衣大口腰帯  
 天昌玉扇

花よりちるま乃春乃月小わく  
 しめの毎とあそびありちる舞衣大口腰帯  
 の舞衣を何めてく月をのむく海つ  
 小浪風志きんふめいさうして下客乃移け  
 移すころ舞衣大口腰帯腰帯打杖玉指輪舞衣大口腰帯湖とふも現  
 志くく老とくやく重恨除玉とみの希  
 人よさうらるや花舞衣大口腰帯

舞衣大口腰帯  
 天昌玉扇  
 我ら是は信



やあな民もゆるめし  
 雲乃戸林は諸もやまらぬ  
 久ぶ名をまゝの申は程も書きの  
 渉りもふらりく  
 眞此郡もあてのばあて  
別名衣懸平尾 一人の  
男の長勝平の掬抄  
 水乃縁の画ひなれるまれば

此のりもあまごふも  
 夏乃字乃花ますき  
 茅店下の月も味も身ハ板橋  
 白乃香乃つれをむと  
 奥山の源乃下は御志  
 長生乃家小く  
打ち

ある何事かとも  
志を松陰乃志井村の業として  
るふと松村未と久一  
たつぬまき牛の作

是乃志人  
たつぬまき牛の作

あるは安物ゆひる親子乃若う  
たつぬまき牛の作

是より親子乃日  
たつぬまき牛の作

より執使して  
たつぬまき牛の作

吾の如くふそふは我人君乃勅と  
あは是より親子乃氏して  
は本業の郡ふあ  
ふまう後  
名を喜ん



かへりてはるるをばけりてはるる  
あまのうらみはるるをばけりてはるる  
かへりてはるるをばけりてはるる  
何となく結ひて乃夫は為者からす  
源氏物語の結もたするるをばけりてはるる  
の業乃あまのうらみはるるをばけりてはるる  
あまのうらみはるるをばけりてはるる

かへりてはるるをばけりてはるる  
あまのうらみはるるをばけりてはるる  
かへりてはるるをばけりてはるる  
今業乃あまのうらみはるるをばけりてはるる  
あまのうらみはるるをばけりてはるる





より七白歳とあるもと菜乃水とまき  
物と 宜や菜と菊は其を御一ひ  
の露乃るふれと物もや天地のひ  
らけ 種乃草木まで 乾唯実なれ  
中あり 其れとごいあり 其れ  
取病乃あまえ やしなひえくハ花  
の父母するも病乃おきしむ一ひ

ててはあふる種衣の神もちて結ふ  
此れ新まへみおるふ乃并れまも菜と  
おりふり老の葉とあ水とんかふり  
う種一かるるれ 宜よかて記菜乃水  
意をゆりて我もふ奏安せんと臨  
これ翁との浦沙意度さみけを  
毎うとめえ 初便も重て感後して

は...  
袖ハ多し...  
え...  
透冠墨...  
持衣大口腰帯扇  
内...  
風...

襲...  
外

に...  
我ら...  
土...  
...  
...

を抄り入てせんくをそりし念記はん  
をす便く徳来現乃の形得るなり  
集法ふあ世をうけら縁くを望むを  
法さこひり井た念の井た水山の折  
多漏るうて浪悠なるも法する代の  
七下二二四下  
念の毎くはる水ありくあをうん  
海くは結念を修く法代をえい

久しきもつぎや法あせし念  
ひく新たまえ川のが見すむ  
ときん志もとらぬ浄法乃水乃  
うきくら波の念よ加勵すもあま  
代事作やまき法代るれや新法の  
多ふくあん高業乃たふゆん

自承天

脚

唐冠持笏大口

連

肩

王

二

王

王

王

王

王

王

王

王

王

王

海海小玩の上東海乃波海をふり舟  
のく浪小入日の香海をまむたの  
天海を月又あるそあこよりい思をえ  
何となく思中乃地も思ふけりく

長小枝小是六たりや日本北地小是ては

七  
些海ふふ子さう入家乃年一さを

彫あうするふてい  
一七尉水衣大口腰帯約半扇  
魚男水衣腰帯約半扇

サマタリ

音い

天  
あくぬひの籠葉乃海の帆ちを月  
波家眺めりか  
一葉や舟をさせつむ  
て碧浪木と浸し越を辞と花露  
う扁舟又棹をう川をさる大湖乃煙水  
波乃どうくやこさひらさきさる海ら面  
白の海とやか  
下  
杉浦はこあよ山知



二二二 目的の<sup>上</sup>月<sup>上</sup>の<sup>上</sup>も<sup>上</sup>と<sup>上</sup>う<sup>上</sup>も<sup>上</sup>や<sup>上</sup>お<sup>上</sup>の<sup>上</sup>  
浪<sup>上</sup>く<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>う<sup>上</sup>家<sup>上</sup>お<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>う<sup>上</sup>記<sup>上</sup>海<sup>上</sup>を<sup>上</sup>  
そ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>こ<sup>上</sup>う<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>う<sup>上</sup>の<sup>上</sup>海<sup>上</sup>は<sup>上</sup>蘇<sup>上</sup>を<sup>上</sup>意<sup>上</sup>の<sup>上</sup>  
ら<sup>上</sup>て<sup>上</sup>一<sup>上</sup>船<sup>上</sup>を<sup>上</sup>海<sup>上</sup>に<sup>上</sup>と<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>か<sup>上</sup>し<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>月<sup>上</sup>と<sup>上</sup>程<sup>上</sup>を<sup>上</sup>  
名<sup>上</sup>海<sup>上</sup>う<sup>上</sup>か<sup>上</sup>く<sup>上</sup> 扱<sup>上</sup>も<sup>上</sup>我<sup>上</sup>方<sup>上</sup>里<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>波<sup>上</sup>海<sup>上</sup>  
を<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>の<sup>上</sup>こ<sup>上</sup>田<sup>上</sup>中<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>地<sup>上</sup>も<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>ぬ<sup>上</sup>少<sup>上</sup>船<sup>上</sup>一<sup>上</sup>艘<sup>上</sup>う<sup>上</sup>  
う<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>事<sup>上</sup>は<sup>上</sup>海<sup>上</sup>翁<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>そ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>海<sup>上</sup>を<sup>上</sup>昇<sup>上</sup>

乃者<sup>上</sup>か<sup>上</sup>扱<sup>上</sup>海<sup>上</sup>翁<sup>上</sup>の<sup>上</sup>名<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>白<sup>上</sup>系<sup>上</sup>天<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>て<sup>上</sup>す<sup>上</sup>  
ま<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>う<sup>上</sup>扱<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>や<sup>上</sup>か<sup>上</sup>始<sup>上</sup>て<sup>上</sup>び<sup>上</sup>ち<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>波<sup>上</sup>り<sup>上</sup>ぬ<sup>上</sup>  
る<sup>上</sup>を<sup>上</sup>白<sup>上</sup>系<sup>上</sup>天<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>て<sup>上</sup>中<sup>上</sup>の<sup>上</sup>何<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>ぬ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>て<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>  
海<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>か<sup>上</sup>扱<sup>上</sup>海<sup>上</sup>翁<sup>上</sup>の<sup>上</sup>人<sup>上</sup>な<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>も<sup>上</sup>い<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>  
きた<sup>上</sup>り<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>て<sup>上</sup>田<sup>上</sup>中<sup>上</sup>の<sup>上</sup>事<sup>上</sup>え<sup>上</sup>く<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>な<sup>上</sup>る<sup>上</sup>事<sup>上</sup>  
也<sup>上</sup> 扱<sup>上</sup>其<sup>上</sup>名<sup>上</sup>を<sup>上</sup>海<sup>上</sup>翁<sup>上</sup>と<sup>上</sup>も<sup>上</sup>い<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>事<sup>上</sup>也<sup>上</sup>  
そ<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>一<sup>上</sup>事<sup>上</sup>な<sup>上</sup>る<sup>上</sup>事<sup>上</sup>も<sup>上</sup>い<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>事<sup>上</sup>也<sup>上</sup>



あといふはは笑ふ君文を屋七八  
詩紙とて屋七の詩紙を我朝の奇と  
そゝるやうにあらば家とていふはをり  
ゆる歌とかひして大和歌とよまなり定て志  
ちめされはらうんといふはゆるをいへ  
そいふんぬあらははははははははははは  
そ目録のうまうまうまうまうまうまう

あといふはは笑ふ君文を屋七八  
詩紙とて屋七の詩紙を我朝の奇と  
そゝるやうにあらば家とていふはをり  
ゆる歌とかひして大和歌とよまなり定て志  
ちめされはらうんといふはゆるをいへ  
そいふんぬあらははははははははははは  
そ目録のうまうまうまうまうまうまう

緒さぬ心乃ぢひ...  
かう此方ハ様しき...  
を秘文を流しゆ...  
流ふか...  
き終るといふ...  
陽るか...  
あ海ぬいなを物...  
わらや...

生るりのと...  
私をを...  
鏡新...  
曲下...  
孝道...  
そのひ...

さるる乃ちこれ梅うえふささののさあす  
を初陽毎約来不遭還本柄なく文字  
此序して是をこれ三十一もこれ序の  
初なりなりヤ初ま乃あ一毎もあをさ  
まごもあつてそくるわこれ梅よこつる  
管乃し之を始ごてそ何の考高  
も人よは先歌をよむたわしハ初りハ

折りそ海の濱乃吉初れ梅ふ生し  
い守らとのつれまう初をよあふん  
和曲乃風俗のくらあつらる延命の  
多ふあ重初てま習ひうか  
乃もそあそひわあを初て舞初乃  
曲もろそを影さん  
そひとるを後ハ初るん

色少後んせよ我うふあ〜はは舞系乃さ  
 被ハ波乃舞系は妙乃吟守る於舞系  
 比厨乃屯の波乃とふ毎何く喜海より  
 山法乃うろろ水色喜き海乃浪乃被  
 此海系系舞乃海あ代さる系此波乃  
 西君皇系袖冠白岳  
 持衣大口腫革扇  
 日  
 全一  
 全一  
 全一

色少後んせよ我うふあ〜はは舞系乃さ  
 被ハ波乃舞系は妙乃吟守る於舞系  
 比厨乃屯の波乃とふ毎何く喜海より  
 山法乃うろろ水色喜き海乃浪乃被  
 此海系系舞乃海あ代さる系此波乃  
 西君皇系袖冠白岳  
 持衣大口腫革扇  
 日  
 全一  
 全一  
 全一

才三此娘文まで海と小う人て海を来  
をすい多入も大珍まららん切曲を  
海小うらうらうすいあそふ小馬衣  
風非う歩小吹りさきそそ唐船を  
より漢ちふりりさき非や非と  
馬小まらるや非と馬代のうらぬ  
そむさうさうぬぬを久し

○祭衣後 脇三大臣 烏帽子 侍衣大口袴袴  
腰帯 扇連固若夫

信之水とあそびて也 笑衣八文  
居小美人 柘老播州室の的

神小使音も神祇社と之ぬ色物入加

もど雨社神と宗十神 名播磨と室の海  
乃睨ふ 立旅衣をそむむる海

赤字の注釈

のからふゆふのたけりる雲や久遠の  
月の都乃山流や雲霞乃云云  
に多りく是をや雲霞乃雲霞のふかふか  
ては又も雲霞乃雲霞のふかふか  
つぎまじりて白羽の矢と立湯作れ  
身 き ん え た り 獨 の あ さ 半 は ん す し  
人來てゐるするまじい  
面女を織水桶指  
連女圖形

乃河原はあななり  
世も神そ紅のたけりる雲霞  
雲霞乃雲霞のふかふか  
風色涼き夕波ふかふか  
乃がらう月あけぬ身乃河原を雲霞の  
いふも振袖ふかふか





とるれ新しく也。とるる白本條は

白神の矢をたてて清作の事を言ふ事

乞へ何よりたる事。ゆてゆえに

室乃の神の神祇にて事有る又是

少夫を神祇の清神神と云ふ神也

唯は此矢れ清神河清なる事

されども清神中を清なりといふ事

和光の神祇おわて極と云ふ事

中はと云ては矢乃清謂委流り

へて熱して神の清事を言ふ

しく中よりともを思ふ儀をあらは

へて若は是は秦の氏女とす

ゆへに神ありて清神なり

清神神ありて清神なり

白羽の矢一車もなぐれ来るべし水鏡は  
うしろをまゆりてゆり居の形ふきいれ  
程なく懐胎し男子とて産むまじき三  
葉とりし時人の國をわけて父をえ  
をさしていひふさおひ指をきくを名刺なるい  
うち中ならんて天ふあらし神と名刺  
雷の神もなり世にま母えらむ神となり

鴨三羽の神取もかやハ橋おりせえ徳  
の海との神祇を君な家男にりた  
まへさうふさをもいささく海り居さあ  
んれ治りし時代をいせさくその八百  
美代の末までもら美お妙まらふ  
まへくをまのりる世のと末乃世  
わさらぬあまもり神神なる偶々





酒と若き〜  
わ我愛く〜  
浅き〜  
念〜  
〜  
乃おらわ〜  
天如 舞衣大口腰帯扇  
河上五雜

法専全極乃〜  
か乃〜  
沙代を〜  
志乃〜  
河上〜  
感通あま〜  
河上〜  
のか〜  
河上五雜

小ひうしてせしむるく 裳をうか  
はたかへん河草木動揺してまのあ  
たるなる口を雷の非砕其状しあの  
大支伎赤心唐冠 幣甲鎗 押毛を主成とち  
幣衣羊切腰帯 幣甲鎗 押毛を主成とち  
志は乃乃別雷乃非也或は徳天唐  
非とたひく屋穴不飛乃又ち  
雷乃乃後 和光因茲結繩乃染わ

馬那の沙半やか 風面海河のそその  
雲妙カ 別雷乃雲乃カをうか  
光輪素乃のふも七雲も七 屋なる程  
木乃有雷乃 面をわうて海く海  
とと 後く 海くく 海く  
ちと 雷く 海く 海く 海く  
北冬又穀如祝也あちとち 後く 海く

時より神徳と威光と影りおぼし  
まはみおのりん此の森も我を  
まらうつあはれをたてまらや  
と別雷の神もまらふらのや  
神もまらふらのつて座定に  
あつてまらひたり

上糸 南麻 脇僧 角帽子水衣大口珠紋扇腰帯

法のもつてまらふらやまら  
まらふらやまらまら

此のまらふらやまら

まらふらやまら

大和路おのりまらふらのや  
控人おのりまらふらのや





いん 如来正覺の如く  
まむす 起世の如くして  
るを 如来の如くして  
をう 如来の如くして  
れむ 如来の如くして  
とあ 如来の如くして  
倉 上 院跡より清い水を一斗の  
池

の歳へ 如来の如くして  
く 如来の如くして  
遠く 如来の如くして  
心ならず 如来の如くして  
乞ある 如来の如くして  
身 如来の如くして

念仏の御事  
念佛八教へのあまのり

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

念仏の御事  
念仏の御事

れ一樹本也<sup>て</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>の<sup>き</sup>を<sup>抄</sup>入<sup>小</sup>巻<sup>の</sup>文<sup>に</sup>  
小巻とい<sup>ふ</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>中<sup>く</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>へ<sup>り</sup>中<sup>ら</sup>り  
此<sup>の</sup>巻<sup>も</sup>同<sup>じ</sup>成<sup>佛</sup>の<sup>文</sup>も<sup>も</sup>ふ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>花<sup>心</sup>  
法<sup>の</sup>う<sup>ら</sup>か<sup>ひ</sup>行<sup>く</sup>へ<sup>り</sup>當<sup>り</sup>小<sup>巻</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>  
兼<sup>の</sup>糸<sup>を</sup>束<sup>と</sup>も<sup>も</sup>き<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>  
ひ<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>へ<sup>り</sup>一<sup>枚</sup>の<sup>上</sup>に<sup>ま</sup>は<sup>る</sup>へ<sup>り</sup>て<sup>樹</sup>  
兼<sup>の</sup>糸<sup>を</sup>束<sup>と</sup>も<sup>も</sup>き<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>  
兼<sup>の</sup>糸<sup>を</sup>束<sup>と</sup>も<sup>も</sup>き<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>  
兼<sup>の</sup>糸<sup>を</sup>束<sup>と</sup>も<sup>も</sup>き<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>  
兼<sup>の</sup>糸<sup>を</sup>束<sup>と</sup>も<sup>も</sup>き<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>

兼の糸を束と<sup>も</sup>もき<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>  
兼の糸を束と<sup>も</sup>もき<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>  
兼の糸を束と<sup>も</sup>もき<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>  
兼の糸を束と<sup>も</sup>もき<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>

○とまへるは  
○に山姫  
○ましころも凡  
○とまへるは  
○に山姫  
○ましころも凡

ね<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>書<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>道</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>ん</sup>ど<sup>も</sup>  
縁<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>へ<sup>り</sup>唯<sup>一</sup>の<sup>山</sup>を<sup>り</sup>ん<sup>ど</sup>や<sup>あ</sup>ん<sup>の</sup>風<sup>に</sup>  
何<sup>ん</sup>に<sup>い</sup>へ<sup>り</sup>と<sup>り</sup>作<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>へ<sup>り</sup>茶<sup>葉</sup>と<sup>も</sup>  
や<sup>あ</sup>ん<sup>の</sup>早<sup>七</sup>代<sup>の</sup>帝<sup>廢</sup>帝<sup>天</sup>皇<sup>の</sup>の<sup>字</sup>  
も<sup>も</sup>は<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>へ<sup>り</sup>右<sup>左</sup>を<sup>成</sup>す<sup>べ</sup>し<sup>ん</sup>  
は<sup>あ</sup>ん<sup>の</sup>甲<sup>の</sup>姫<sup>は</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>ん</sup>ど<sup>へ</sup>り<sup>て</sup>  
洋<sup>中</sup>の<sup>日</sup>禿<sup>彌</sup>志<sup>は</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>ん</sup>ど<sup>へ</sup>り<sup>て</sup>  
兼<sup>の</sup>糸<sup>を</sup>束<sup>と</sup>も<sup>も</sup>き<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>  
兼<sup>の</sup>糸<sup>を</sup>束<sup>と</sup>も<sup>も</sup>き<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>  
兼<sup>の</sup>糸<sup>を</sup>束<sup>と</sup>も<sup>も</sup>き<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>  
兼<sup>の</sup>糸<sup>を</sup>束<sup>と</sup>も<sup>も</sup>き<sup>つ</sup>め<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>武</sup>

ねあまの書<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>道</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>ん</sup>ど<sup>も</sup>  
縁をあらん<sup>ど</sup>へ<sup>り</sup>唯<sup>一</sup>の<sup>山</sup>を<sup>り</sup>ん<sup>ど</sup>や<sup>あ</sup>ん<sup>の</sup>風<sup>に</sup>  
何んにい<sup>へ</sup>り<sup>と</sup>り作<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>へ<sup>り</sup>茶<sup>葉</sup>と<sup>も</sup>  
やあんの早<sup>七</sup>代<sup>の</sup>帝<sup>廢</sup>帝<sup>天</sup>皇<sup>の</sup>の<sup>字</sup>  
ももはらん<sup>ど</sup>へ<sup>り</sup>右<sup>左</sup>を<sup>成</sup>す<sup>べ</sup>し<sup>ん</sup>  
はあんの甲<sup>の</sup>姫<sup>は</sup>い<sup>は</sup>ら<sup>ん</sup>ど<sup>へ</sup>り<sup>て</sup>  
洋中の日<sup>禿</sup>彌<sup>志</sup>は<sup>い</sup>は<sup>ら</sup>ん<sup>ど</sup>へ<sup>り</sup>て





二二下  
すすせ

△  
赤  
先  
し

信を致しきて奇物を見る人  
山姫。うふ影をひく海や花お付て  
おの娘の板をのり花はら雲お舞であら  
分らば雲お舞であらりあらま えて  
おの娘の板をのり花はら雲お舞であら  
分らば雲お舞であらりあらま えて  
おの娘の板をのり花はら雲お舞であら  
分らば雲お舞であらりあらま えて

上  
ら

よもあ人祓を喜樂のく妙善守元  
るまうし奇舞の堂のまはわらう  
流ふゆよあらまら流あるきはよ  
西邊天翁  
思堂下衣大口扇終  
乃精魂あり我楽海おまう  
純類書に  
お小ふま殿妙安系世帯の衣もある





一日上丁（下） 一寺を馬郡登輝 後水の碑の書  
 後水の碑の書 後水の碑のひびきおの  
 妙善の足伝法多そを法事おふわ  
 海縁一光の通照十方の生をくく西方  
 に遠く掛く法（下）の船乃見かなまき法（下）の舟  
 のさかふく（下）なまの愛の果さか（下）のく  
 を成ふ（下）まを

明和七年の祈寺見書り

三井寺 太丈女 西曲見萬年を歌  
七十一歳

南無大慈大悲の親世もくくはる  
 一がのらん抄ひの末一悔念行於  
 ありまのや年月日を道るまをか  
 さねつるすのま末なもつむむり  
 ありまのまをを憐見ゆへひ子の  
 の末あをを成ゆんゆくとまあ中を

ねん<sup>上</sup> 粘<sup>上</sup>る<sup>上</sup>本<sup>上</sup>の<sup>上</sup>た<sup>上</sup>を<sup>上</sup>く<sup>上</sup>む<sup>上</sup>は<sup>上</sup>く  
 く<sup>上</sup>の<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>は<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>の<sup>上</sup>み<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>る<sup>上</sup>お  
 二一ひ<sup>上</sup>か<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>ん<sup>上</sup>二二ひ<sup>上</sup>か<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>え  
 二二ん<sup>上</sup> 二一あ<sup>上</sup>二一ま<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>一睡眠の内  
 お<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>した<sup>上</sup>お<sup>上</sup>靈<sup>上</sup>靈<sup>上</sup>着<sup>上</sup>と<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>り<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>て<sup>上</sup>い<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>ま  
 二二難<sup>上</sup>屋<sup>上</sup>の<sup>上</sup>一屋<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>下<sup>上</sup>向<sup>上</sup>と<sup>上</sup>り<sup>上</sup>り<sup>上</sup>と<sup>上</sup>か  
 わ<sup>上</sup>く<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>く<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>む<sup>上</sup>お<sup>上</sup>一<sup>上</sup>お<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>む<sup>上</sup>お<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>む<sup>上</sup>

二二江<sup>上</sup>の<sup>上</sup>三<sup>上</sup>井<sup>上</sup>寺<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>集<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>り<sup>上</sup>と<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>る<sup>上</sup>お<sup>上</sup>靈<sup>上</sup>靈<sup>上</sup>着  
 二二を<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>り<sup>上</sup>て<sup>上</sup>い<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>の<sup>上</sup>二二事<sup>上</sup>や<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>い  
 二二の<sup>上</sup>若<sup>上</sup>お<sup>上</sup>何<sup>上</sup>せ<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>三<sup>上</sup>井<sup>上</sup>寺<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>り<sup>上</sup>と<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>い  
 僧<sup>上</sup>三<sup>上</sup>人<sup>上</sup>角<sup>上</sup>帽<sup>上</sup>子<sup>上</sup>大<sup>上</sup>口<sup>上</sup><sup>下</sup> 仰<sup>上</sup>物<sup>上</sup> 袴<sup>上</sup>揚<sup>上</sup>敷<sup>上</sup> 二二杖<sup>上</sup>を<sup>上</sup>古<sup>上</sup>の<sup>上</sup>遺<sup>上</sup>品<sup>上</sup>の<sup>上</sup>遺<sup>上</sup>品<sup>上</sup>  
 水<sup>上</sup>衣<sup>上</sup>腰<sup>上</sup>帶<sup>上</sup>肩<sup>上</sup>袂<sup>上</sup>教<sup>上</sup>子<sup>上</sup>袴<sup>上</sup>扇<sup>上</sup> 二二杖<sup>上</sup>を<sup>上</sup>古<sup>上</sup>の<sup>上</sup>遺<sup>上</sup>品<sup>上</sup>の<sup>上</sup>遺<sup>上</sup>品<sup>上</sup>  
 二二月<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>の<sup>上</sup>屋<sup>上</sup>を<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>る<sup>上</sup>二二江<sup>上</sup>の<sup>上</sup>弱<sup>上</sup>園<sup>上</sup>

二二寺<sup>上</sup>に<sup>上</sup>住<sup>上</sup>侶<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>る<sup>上</sup>二二寺<sup>上</sup>の<sup>上</sup>遺<sup>上</sup>品<sup>上</sup>を<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>る<sup>上</sup>  
 二二寺<sup>上</sup>の<sup>上</sup>遺<sup>上</sup>品<sup>上</sup>を<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>る<sup>上</sup>二二寺<sup>上</sup>の<sup>上</sup>遺<sup>上</sup>品<sup>上</sup>を<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>る<sup>上</sup>  
 二二寺<sup>上</sup>の<sup>上</sup>遺<sup>上</sup>品<sup>上</sup>を<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>る<sup>上</sup>

おびし〜御作の御お師の御おは  
おひつて久利招きおのくわらひ

と夜に八月十日おあつ川の東に御見わら

んささともあひ傳書のおふあ月を眺  
めりやとさるる新たらひおあつをさる月のと  
骨とくく夕まのそくんおをさるぬち  
りらとらお書をを願ふやあつらり月の

名おび日影うれく

面曲見えキ樹小神上  
絲水衣 勝帯 扇 藤掛お

美書あつらひくすひ神をけつらうの  
ゆきもをゆきせん志の山戦打てあつ  
の東の湖のあつてあつえの心さるう  
見ぬおされおをせんまると国の系あつ  
ひ中よあつ有難のあつをさるらう  
んあつらあつをさる残り物あつらう

Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript page. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines. The script is dense and includes several red ink markings, possibly indicating specific words or structural elements. The paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript page. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines. The script is dense and includes several red ink markings, possibly indicating specific words or structural elements. The paper shows signs of age and wear.



やは清く美くも居らん人の影もあはれ  
 鳴る鐘の音の如く、成程の鐘も  
 せえぞういもねをつくぬきならぬ  
 いかかぢう霜敷あてく明も時を  
 しかぬん 海鐘はよきあそびと云  
 どのぬきそ ち度云梅おれら  
 しと月おゆせし鐘の音なりおるさうあ

此れをらあな故人乃半粒人の身さして

鐘はくきう 七音の月お鐘はく半  
 狂人さかひひひひそあなゆめいさく  
 圓くして海鐘をまゝ進漸くして雲  
 懼まのび後白あるもいおの月に象

らあすまうし今宵一痛そめは光つるも  
 のああああ〜んといふはあをまあをゆら

娘さうふ心動きき梅津のちり降るん  
ん下いゆもさあ一ぬむ一詩投一とさふ

う程乃世のちんありあもも月まか  
らありゆして居つてなまねおのまハ  
ゆう一早段入居人一ま好惚のま友をさ後  
さや法のおもおふん物衆乃降を  
はく時ハ 諸行をきとひく一なり

同上一後衆の降をばく時ハ一上一色生滅法一

同上一けく一あり一ヤ一農好一御書ハ一生滅一已

同上一入多一と一辭滅一為一衆を一ひ一きて一美

同上一提一の一乃一れ一降一乃一あり一月一色一教一を一説一く一百

同上一ハ一好一惚一の一縁一あり一の一縁一く一着一の一よ一れ一美一

同上一色一だ一ち一や一つ一き一さ一ら一も一後一衆一乃一降一乃一我一色

同上一あ一侍一の一雲一晴一て一ま一お一れ一月一の一雲一を一眺一め

おろそめきん 夫も葉は種のかみ  
花の卯おあぬ 又夢池の柳乃又も  
西中ゆ海 其卯のくめは其の  
人胡乃梅のう梅くきく 名もさあの  
尾上乃鐘曉うまて梅の影くひる月  
巨あもさぐの物影も幸う難波ち  
なごころお初ま種のをと 法はぬや

法乃夢明人 山吉は去乃又へをさえ  
乃まへ入逢の種おあやぬらんをお  
めさるをさあはまとられぬらんを  
のりせをあひむをの恨もさるは  
あふは梅の種や影くくらん又竹青の  
更替く種のおう回をあぬ別をさか  
しむるを物うを係さるは意あの





らしてはるるく **あはれ** **あはれ** **あはれ**

さうすはるるく **あはれ** **あはれ** **あはれ**

のあはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**

はるるく **あはれ** **あはれ** **あはれ**

のあはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**

あはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**

あはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**

七五

あはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**

あはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**

あはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**

あはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**

あはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**

あはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**

あはれに **あはれ** **あはれ** **あはれ**







いふの言はくく難波の浦おきく

わらわら預おもひよやはのお難波の浦

の言おきくしてはびあめてな事つ及の言

あまおもひよとては先ふわらわ

な事つ及の言あをるりては今に

あははなまきしりつ揚屋家ひん

あてハ親智とくなく後妻あま今と

浦お遠道しはあをるりては今に  
実作をわははあお昔は遠道あは  
わらわら預おもひよやはのお難波の



山一と雲おとく故人のふかやけ  
 けしめくひ雲者と雲人色唯何と  
 わるいはお持屋邦人として難波乃重  
 をは雲就しとてさとをなうりし素  
 の我色着そ難波津の名おあある  
 邦人の捨りしの雲乃重とて  
 枯るれあなくさしとてめれい

<sup>わ</sup>  
 ぬしとて雲の六列入集おとく  
 けしめくひ雲おとく故人のふかやけ  
 けしめくひ雲おとく故人のふかやけ  
 けしめくひ雲おとく故人のふかやけ  
 けしめくひ雲おとく故人のふかやけ  
 けしめくひ雲おとく故人のふかやけ



いさぎよくぬがし  
ありの急はむく  
け市に生花を  
やく  
後八月をもち  
空れうらふ  
やく

いさぎよくぬがし  
ありの急はむく  
け市に生花を  
やく  
後八月をもち  
空れうらふ  
やく

いさぎよくぬがし  
ありの急はむく  
け市に生花を  
やく  
後八月をもち  
空れうらふ  
やく

いさぎよくぬがし  
ありの急はむく  
け市に生花を  
やく  
後八月をもち  
空れうらふ  
やく

いさぎよくぬがし  
ありの急はむく  
け市に生花を  
やく  
後八月をもち  
空れうらふ  
やく

いさぎよくぬがし  
ありの急はむく  
け市に生花を  
やく  
後八月をもち  
空れうらふ  
やく

いさぎよくぬがし  
ありの急はむく  
け市に生花を  
やく  
後八月をもち  
空れうらふ  
やく

いさぎよくぬがし  
ありの急はむく  
け市に生花を  
やく  
後八月をもち  
空れうらふ  
やく

いさぎよくぬがし  
ありの急はむく  
け市に生花を  
やく  
後八月をもち  
空れうらふ  
やく

いづとまゝくまののほろまゝ  
西のやまのほろまゝ  
とら理らふ 波のほろまゝ  
おまのまゝ 舞火とまゝ  
乃とくよまゝの月姫より  
乃とくよまゝの月姫より  
乃とくよまゝの月姫より  
乃とくよまゝの月姫より  
乃とくよまゝの月姫より

せよの乃ほおら二網舟網舟のえりや  
くまのまゝのまゝのまゝ  
はのくまのまゝのまゝ  
西のまゝのまゝのまゝ  
おまのまゝのまゝのまゝ  
乃とくよまゝのまゝのまゝ  
乃とくよまゝのまゝのまゝ  
乃とくよまゝのまゝのまゝ  
乃とくよまゝのまゝのまゝ  
乃とくよまゝのまゝのまゝ





対の口あひく  
あひく  
あひく

定て那美くせひく  
あひく  
あひく

和やとひひ  
あひく  
あひく

いふ衣人帯はう  
あひく  
あひく

ゆ来ゆき玉乃緒乃結ふ  
あひく  
あひく

あひく  
あひく  
あひく

あひく  
あひく  
あひく

く  
あひく  
あひく

あひく  
あひく  
あひく

あひく  
あひく  
あひく

あひく  
あひく  
あひく

あひく  
あひく  
あひく

あひく  
あひく  
あひく

あひく  
あひく  
あひく

あつらひのつらふふあそびに難波の浦も位  
うきあつらひのつらふふあそびに難波の浦も位  
何れ難波の浦へ行くき 宝を難波  
は海老山の左に支那のなる子ら乳  
同上 何れ何れつらふの難波へ行く  
り海老山をわけてあつらひの浦も位  
我々のやうにわけてあつらひの浦も位

あつらひのつらふふあそびに難波の浦も位  
り海老山の左に支那のなる子ら乳  
り海老山の左に支那のなる子ら乳  
り海老山の左に支那のなる子ら乳

り海老山の左に支那のなる子ら乳  
り海老山の左に支那のなる子ら乳  
り海老山の左に支那のなる子ら乳  
り海老山の左に支那のなる子ら乳



Handwritten Chinese text in cursive script (草书) on the top page of a manuscript. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines. Red ink is used for certain characters and strokes, likely serving as a guide for pronunciation or rhythm. The paper shows signs of age and wear, with some staining and a small tear on the right side.

Handwritten Chinese text in cursive script (草书) on the bottom page of a manuscript. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines. Red ink is used for certain characters and strokes, likely serving as a guide for pronunciation or rhythm. The paper shows signs of age and wear, with a prominent tear on the right side.





讀高先生詩人

少子馬  
好

上

卷五

卷五

